

第19回舟橋聖一文学賞

第37回舟橋聖一顕彰青年文学賞

受賞録



彦根市





はじめに

彦根市長 田島 一成

舟橋聖一文学賞ならびに舟橋聖一顕彰青年文学賞の受賞者の皆さま、このたびのご受賞、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

文豪・舟橋聖一氏の名作『花の生涯』は、昭和三十八年にNHK大河ドラマ第一作として放送され、これを機に井伊直弼公や彦根の名が全国に広まりました。本賞は、氏の偉業を後世に伝えるために設けたものです。

舟橋聖一文学賞は、彦根市民が豊かな心を育み、市に香り高い文化を築くため、すでに世に出た優れた小説の中から、舟橋聖一文学の世界に通ずる作品にお贈りしております。一方で、舟橋聖一顕彰青年文学賞は、公募によって全国から作品を募り、将来を嘱望される若い書き手たちの創作意欲と才能に光を当てる賞として、文学を志す若者たちの成長を後押ししながら、教育や文化の振興へと繋げていくことを目的としております。今回も青年文学賞には多数の応募が寄せられ、豊かな感性で描かれた作品の中から可能性に満ちた受賞作が選ばれました。

創作という営みは、ひとつの完成に至るまで、幾度も自身の言葉と向き合い、悩み、試行錯誤を重ねる地道な道のりです。しかし、その過程こそが、作品に深みと真実をもたらします。受賞された皆さまには、それぞれの立場から文学に向き合って生まれた成果を誇りに、これからも筆を執り続けていただければと願っております。

現代社会は、情報化やデジタル技術の発展により、利便性が増す一方で、人と人とのつながりが希薄になりがちな側面もあります。だからこそ、物語や文章が生み出す感動や想像力が、人々の心を結びつける役割を果たしているのではないのでしょうか。文学には、時代を超えて人と社会をつなぎ直す力があります。

本市では今後も、舟橋聖一氏の功績を顕彰し、その精神を受け継ぎながら、郷土が育んだ文化的資産を活かした文学振興を継続してまいります。本賞を通じて、より多くの方々に文学の魅力や創作の喜びが伝わり、新たな表現者が羽ばたいていくことを心から期待しております。

最後に、選考にご尽力いただきました委員の皆さま、本賞の開催・運営に関わってくださったすべての方々に深く感謝申し上げますとともに、受賞者の皆さまの今後ますますのご活躍を祈念し、あいさついたします。

令和七年十二月

《舟橋聖一文学賞・舟橋聖一顕彰青年文学賞選考委員》

佐藤 洋二郎



福岡県生。作家。元日本大学教授。
『夏至祭』で第十七回野間文芸新人賞・『岬の蜩』で第四十九回芸術選奨文部大臣新人賞・『イギリス山』で第五回木山捷平文学賞受賞。
主な著作・・・『夏の響き』『未完成の友情』『お母さんブタのダンス』『グッバイマイラブ』『親鸞 既往は咎めず』『Y字橋』『夜を抱く』『日本史の嘘』など多数。

藤沢 周



新潟県生。作家。元法政大学教授。
昭和五十九年〜平成八年書評紙『図書新聞』の編集者を務めた。平成五年『ゾーンを左に曲がれ』で作家デビュー。平成十年『ブエノスアイレス午
前零時』で第一一九回芥川賞を受賞。
主な著作・・・『死亡遊戯』『紫の領分』『ソロ』『サイゴン・ピクアップ』『焦痕』『箱崎ジャンクション』『雪闇』『心中抄』『キルリアン』『波羅蜜』
『武曲』『武蔵無常』『サラバンド・サラバンダ』『世阿弥最後の花』『鎌倉幽世八景』など。

増田 みず子



東京都生。作家。
昭和六十年『自由時間』で第七回野間文芸新人賞受賞。『シングル・セル』で第十四回泉鏡花文学賞・『夢虫』で第四十二回芸術選奨文部大臣新人賞・
『月夜見』で第十二回伊藤整文学賞受賞。
主な著作・・・『麦笛』『自殺志願』『内気な夜景』『火夜』『小説』『理系的』など。

富岡 幸一郎



東京都生。文芸評論家。関東学院大学教授。
『意識の暗室 埴谷雄高と三島由紀夫』で『群像』第二十二回新人文芸賞評論最優秀秀作受賞。
主な著作・・・『戦後文学のアルケオロジー』『仮面の神学 三島由紀夫』『使徒の人間 カール・バルト』『千年残る日本語へ』『最後の思想 三島
由紀夫と吉本隆明』『北の思想 一神教と日本人』『川端康成 魔界の文学』『平成椿説文学論』『入門 三島由紀夫』『古井由吉論 文学の衝撃力』
など多数。近著に『石原慎太郎の時の時「戦後」への最後の反逆者』『ビジネスエリートのための教養としての文豪』など。

第十九回 舟橋聖一文学賞受賞者



(c) 開めぐみ

作品名 『惣十郎浮世始末』

著者 木内 昇（きうち のぼり）

発行所 中央公論新社

発行日 令和六年（二〇二四年）六月十日

著者略歴

一九六七年、東京都生まれ。二〇〇四年『新選組 幕末の青嵐』で小説家デビュー。〇八年に刊行した『茗荷谷の猫』が話題となり、早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞を受賞。一年に『漂砂のうたう』で直木賞、一四年に『櫛挽道守』で中央公論文芸賞、柴田錬三郎賞、親鸞賞の三賞、二五年に『雪夢往来』で中山義秀文学賞、同年『奇のくに風土記』で泉鏡花文学賞受賞を受賞。他の作品に『よこまち余話』『光炎の人』『球道恋々』『剛心』『かたばみ』『惣十郎浮世始末』『浮世女房洒落日記』などがある。

第三十七回 舟橋聖一顕彰青年文学賞受賞者



優秀作品

作品名

胸のイボ

作者

高屋 風沙（たかや なぎさ）

住所

神奈川県横浜市

第十九回 舟橋聖一文学賞 講評

選考委員 増田 みず子

『惣十郎浮世始末』 選評

小説の価値は面白さに尽きます。時間を忘れて読みふけりました。作品全体を包む心地よさは素晴らしかったです。主人公が格別に善人であることも、それなりの悩みをひそかに胸に抱えていることも好ましく感じました。叶うなら隣の家に住んでいてもらいたいと思いました。何か困ったことがあ

ったら声をかけてね、と言ってみたいと思います。誰にでも好かれる惣十郎は、捕り物名人の同心を越えて、ヒーローに近いです。こんなにいい場面ばかりの小説を書いてくれる作家はめったにいないと思いました。

第十九回 舟橋聖一文学賞

木内 昇

『惣十郎浮世始末』作品についてならびに受賞コメント

「受賞作品のあらすじ」

改革の嵐が吹き荒れ、疫病が日常をおびやかす江戸後期。浅草の薬種問屋「興濟堂」で火事が発生し、焼け跡から二体の骸が見つかった。北町奉行所の定町廻同心・服部惣十郎は、その不審な状況に疑念を抱き、岡っ引の完治や小者の佐吉とともに犯人を追う。一方、町医者の子春は豊かな知見で惣十郎の調べを助ける傍ら、疱瘡（天然痘）の苦しみから人々を

救うための医療書の翻訳を世に出したいと奔走していた。怪しげな祈祷師の騒動や、湯屋の三助の母殺し疑惑などにも向き合いながら、やがて惣十郎は思いも寄らぬ真相に辿り着く……。罪を見つめて、人を憎まず。江戸の町に生きる人々の哀歓を時代背景とともに丹念に描く、捕物帳の新たな傑作。

「受賞のコメント」

このたびは、舟橋聖一文学賞をいただきまして、大変光栄に存じます。

『惣十郎浮世始末』は、私にとっては初めての捕物帳となります。本作の連載をはじめるにあたり、付き合いの長い文芸記者の方から「捕物帳を書いてほしい」とのご提案を受けました。それまで捕物帳を書くかと思つたことすらなかった私は、大変戸惑いました。また、小説の題材に関しては自分で決めていたため、提案に沿つて書くというのとはじめてのことだったので。

自分の中での定法に拠ることなく、一作一作なにかしらの挑戦をしようと心がけて書いてきたものの、今回は新聞連載という大舞台。あまり冒険するのはどうか。でも、自分の仕事により形で風穴をあけられるかもしれない——だいぶ逡巡したのちに挑戦することにしたのです。

この挑戦が吉と出たか凶と出たか。それは読者に委ねるよりありません。ただ、本作に登場する惣十郎や梨春、完治、佐吉、お雅といった面々と共にいる時間は、私にとつてとにかく楽しい時間でした。そうやつて書き上げた作品が、このような賞をいただけて、報われたように感じています。この小説に関わってくださった、すべての方に感謝申し上げます。

第三十七回 舟橋聖一 顕彰青年文学賞

選考委員 増田 みず子

講評

小説は好きなことを好きなように書けばいいと思っています。小説を書きたいと思ったのは、その自由さに心ひかれたからでした。一人の人間の、誰も知らない心のうちが、誰にでもわかるように書かれているのが驚きでした。人の心はわからない。自分の心も整理がつかない。それが知りたくて、次々と小説を読み続けました。大人になる少し前あたりから、小説らしきものを書きはじめました。最初に書いたものがどんなものだったのか覚えていません。形になりませんでした。ばらばらの言葉が、つながりもなく並んでいただけでした。三十歳のとき、初めて何とかまとめることができて、雑誌の新人賞に応募しました。結果、最終候補の四作に残ったという知らせが届きました。で、落選しましたけど、また新しいものを書いて送るように、という言葉編集部からもらえました。それ以後も書けなくて苦労しました。どうやって書いたのか、書き終わると、忘れてしまいます。一作ずつ、書くたびにじたばたします。なかなか内容のある正しい文章が書けない、というのが実感でした。あがいているうちに何となく呼吸困難状態がやっと解消された感じがすると書き終わっています。ずっとそんなふうです。少しもうまくならないし、らくにもならない。でも不思議なことに、飽きない。こ

れしかこんなに夢中になれるものはない、と思っているのです。

今回、青年文学賞の審査をしていて、皆さんの作品を読みながら、そういうことを思いだしていました。自分なりの小説の形を作ろうと頑張っている感じが伝わってくる作品が多かったのかもしれない。小説は、一番大事なのは、真似が厳禁ということです。自分が新しくつくり出さなければなりません。そこが魅力でもあるのですが、案外その実現がむずかしいのは、ほとんどの人が小説を書き始めるのは人の小説を読んで自分もこういうものを書きたいと思うからです。

「胸のイボ」受賞おめでとうございます。まず、タイトルにびつくりしました。このタイトルで小説を面白く読んでもらうにはどうすればいいか、考えました。書けません。でもこの作者は自分のおばあちゃんの胸のイボを作品の中心におきました。おばあちゃんのイボなら孫娘はその胸に抱かれてそのイボに愛しさを感じる、と読みながら気がつきました。そして自分の祖母にも鼻の横に大きなイボがあったの思い出して急に愛しくなりました。老いて、せつないよ、というのが口癖になった祖母を、孫娘が身の回りの世話をするようになる、大変だけど孫娘の記憶のなかに祖母のシンボルの

ようにイボが残る。やがて自分にも同じ場所同じ大きさのイボができる。気持が悪くてとつてしまう。結婚して子供ができると、その子供にも同じようなイボが……。この作者の仕組んだ小説の形が見えてきます。

ついでですが私の祖母のイボは母と私を飛び越して私の妹の鼻の横に出現しました。「胸のイボ」を読んだあとはずっとそのことが頭から離れません。小説の力です。

第三十七回 舟橋聖一顕彰青年文学賞

高屋 風沙

「受賞のコメント」

応募資格の三十歳である最後の年に、賞をいただけて、大変うれしく思います。

この小説は祖母との思い出をもとに書いた話で、温かい思い出も、冷たい思い出も、すべて一人の人間の物語だと思い、作品にしました。自分の祖母との思い出の欠片が、主人公真智や真智の祖母の物語の一部として、自然に溶け込んでいたらいなと思います。

自分自身は、そんなに長い介護経験がないので、断片的な記憶と調べた内容から介護の場面は書きました。書いていて難しかったのは、祖母の年を取ることへの受け入れ難さ、認知症による混乱です。そんな祖母の姿を見て真智の気持ちに

変化が生じるので、どちらの気持ちも表現したかったです。また対比表現は、読んでいても書いていても好きなので、この作品でも美しい姿と年老いて汚れたままになっている姿を書きました。年を取るということを伝えるのを表現しやすかったこともありますし、登場人物の性格も表現できたと思います。

人のもつ様々な感情や考えを描き出すというのは難しく、書くことに消極的になることもあります。今回このような賞をいただき、より積極的に物語を書きたいと思えるようになりました。これから日常の中の物語を自分なりに描き出せたらいいなと思います。

作品目次

第三十七回 舟橋聖一 顕彰青年文学賞 優秀作品

胸のイボ 高屋 風沙

せつないよ、せつないよお。

そう目の前で消え入るような声で呟いているのは、真智^{まち}の祖母である。

「せつない」なんて、歌の歌詞でしか聞いたことがなかった。実際に言っている人は初めて見たかもしれない。

ベッドの上で、茶色く汚れた天井に、祖母は届かない手を伸ばしている。何かを掴もうとするように伸ばした、微かに震えた枯木のような茶色く皺だらけの手。節だった指を広げて蛍光灯の光に手をかざして見ているようにもみえる。

「せつないよ」

相変わらず小さな声で、だが年老いた病人の割には強い語尾でまた呟いた。

何がそんなにせつないのか。今、真横にいて見舞っているのに。そんなにせつないなら、こちらを向いて話をしたらどうなのか。なにか欲しいものがあれば、言ってくれば持つてきてあげるし、して欲しいことがあればしてあげられるか

もしれない。

「何がそんなにせつないの？」

真智はもどかしくなって、祖母の顔をのぞき込みながら聞いた。

「せつないんだよ！ 戻りたいなあ、昔に戻りたい」

その時、以前から祖母が「昔に戻りたい」と呟いていたことを思い出した。普段は明るい祖母が時々ため息のように呟いていたのだ。幼かった真智は、意味もわからず、疲れたときに出るため息と同じようなものだと思っていた。

だが、認知症が進んでからはうわ言のように、より頻繁に呟くようになった。

その度に真智はイライラする。庭先で転んで脚を折ってから、寝たきりになった祖母をかわいそうだとは思う。だからこそ、少しでも助けてあげたいと思って面倒を見てきたつもりだ。なのに、真智のことは見えてないように虚空を見つめて、思い出したように「せつない」「昔に戻りたい」と言う祖

母を見ると、こちらの方がせつなくなるのだ。

黒い気持ちが胸の辺りで一点に集まって固まっていく気がした。

真智が幼いとき、両親は共働きで、平日は家にいることは少なかった。真智が起きる前に出かけ、真智が寝た後に帰ってくるくらい二人とも忙しかったのだ。だから真智の面倒はほとんど祖母が見ていた。

「お風呂入ろうか」

夜七時の楽しみにしていたアニメを見終わる頃、祖母は優しく声をかけてくれる。ちゃんと来週の予告まで見終わるのを見計らって声をかけてくれる。孫娘の大好きなテレビ番組がある時間を把握して、きっちり七時半になるのを待っていて声をかけていた。もちろんその時間にぴったりに入れるように湯船に湯を張っておく。

五歳の真智はそんな気遣いに思い至るわけもなく、先ほど

観ていたアニメの話を興奮して祖母にも話す。

「来週の話も楽しみだなあ」

夢中で話す真智の服を、慣れた手付きで脱がしていく。手を万歳にして、シャツを脱がしてもらうとき、祖母の顔が真正面にきて、一層興奮しながら今日のアニメの山場を再び語りだす。

祖母はただ優しく微笑んでいた。

「おばあちゃんは、どのモンスターが好き？」

「さあ、どれだろうねえ」

アニメの内容などはわからない祖母にお構いなく真智は話し続ける。気づけばすでに祖母は服を脱いでいた。思えば六十五歳にしては白く張りのある肌だった。二の腕と胸、下腹と太ももがムチムチと肉付きがよかった。白い裸体の上に金のネックレスだけが二連乗っている。今もその姿を思い浮かべる真智の脳内では、絵画の貴婦人のように、陶器のような白色と鈍く光る金色をくっきりと描くことができる。冷たさ

さえ感じられる冴えた白色の肌に一点汚れのようなイボがある。少し紫がかった茶色い、小豆大の隆起したイボが両乳房の間の上辺りに一粒あった。そのイボがなければ祖母ではないような気もする、祖母の特徴だとも思えた。

湯船の湯を混ぜて湯加減を確かめ、桶ですくって真智と自分に掛け湯をする。はじめのこの一杯は、肌が慣れていないので少し熱く感じる。ひゃあっと、肩をすくめている真智をイスに座らせて、祖母はタオルに石鹸を擦り付けて泡立てていく。白いふわふわとした泡は、ケーキのクリームみたいで、見ているとワクワクする。華やかな香りもするので、大人しく洗われるのを待つ。泡のついたタオルが身体を滑る度、洗いやすいように腕を上げたり、顎を上げて首を差し出したりする。毎日の習慣から身体が自然に動くのだ。

優しく丁寧に真智の小さな手足を洗い上げる。一通り洗い終わると、これも優しく桶で湯をかけて流してくれる。一杯、二杯と、左肩から右肩へ、泡を流し終わると、真智を湯船に

入れる。他の子に比べて身長が少し高かった真智は、最近、一人で湯船に入れるようになった。と言っても、身長一二〇センチ、湯船の高さに対して股下がギリギリのため、イスを使って湯船に入る。祖母は心配そうに手を添えながら、真智が湯船に入るまで見ている。

真智が熱がるため、お湯の温度は低めの三十七、八度。それでも湯が混ざってないと足を浸けた瞬間すごく熱く感じる。桶の先を使って掻くように湯を混ぜるが、真智の腕は短く底の方まで混ぜきれない。やはり大人に混ぜてもらわないと熱くて入れない。

先ほど祖母が混ぜてくれたおかげで、真智は気持ちよく肩まで浸かれ、ふうっと大人のように息を吐く。

揺れる水面がおさまってくると、白い柔らかな肌に生えた細かい産毛に、小さな気泡がついているのが見える。そっと反対の腕で、腕についた気泡をなぞると、さあっと気泡は水面に上がっていき消える。これが面白く、湯に一番に浸から

せてもらうのが好きだった。

静寂と祖母があかすりタオルで石鹸を泡立てる音。シャリシャリ擦る音につられて目をやると、祖母はさっさと、身体を洗っている。

沈黙を持て余して、またさっきのアニメの話題を持ち出す。

「もし、火のモンスターがいたら、お風呂早く沸くかな？」

「んー？　どうだろうねえ。そうだったら便利だろうね」

祖母は首を洗いながら答えてくれる。風呂場の壁を眺めている目は、真智からはとても優しく、しかし涼しく見えた。

滑らかに動かしていた手がガツンと止まる。

「痛っ」

金のネックレスにあかすりタオルが引っかかり、ネックレスに胸のイボが引っ張られたのだ。

よほど痛かったのか、しばらく祖母は胸を押さえてうずくまる。

「……大丈夫？」

いつもちやきちやき動く祖母が、痛がる姿は珍しく、心配になって声をかける。

「大丈夫。ちよつとネックレスがイボに引っかかっちゃって」
一呼吸置いて、胸のイボを軽く擦りながら恥ずかしそうな笑顔をこちらに向ける。

泡を流して、静かに祖母も湯船に入った。真智の真向かいに白い乳房と、金色のネックレス、そして紫茶のイボがある。
二連のネックレスは一連目がやや長く、イボの外側にかかり、二連目はそれよりも短くイボの上に曲線を描いていた。どちらもチェーンネックレスで、短いネックレスの方が細かいチェーンになっている。

風呂に入る時でさえ、祖母はネックレスを外さない。よほど大切なものなのだろうか。それともお気に入りなのだろうか。

「それお風呂のときも外さないの？」

胸元のネックレスを指さすと、祖母は不意を突かれたよう

に、困ったように笑った。節だった指でネックレスを回し、留め具部分を見せてくれた。

「いちいち外すの面倒くさくてね。目も悪いし、指もうまく動かないし。あとなんか絡まってね」

見れば留め具部分には、何種類かの服の繊維がカラフルに絡まりついていた。

軽く真智が爪で引っ張ってみたが、繊維同士と金の鎖が絡まり合い、ハサミなどで切らなければ取れそうもなかった。

「それ、宝物なの？」

「そうだよ、これは本物の金だよ」

微かに揺れる水面にネックレスを持ち上げながら、鼻歌でも歌うように祖母は答えた。

「長い方は、真智ちゃんのおじいちゃんからもらったので、短い方は別の人にもらったの。こっちの方が安いね。真智ちゃんが大きくなったら、あげようね」

本物の金だと言うが、真智にとっては飾り気のない金色の

ただの鎖にしか思えなかった。もっと花やハートや星だの、可愛い飾りのあるネックレスならよかった。それに、テレビで見たことのある金の方がキラキラ光っていた気がする。それに比べて目の前のネックレスはくすんでいるように見えた。だが、得意そうな顔でネックレスを見せている祖母に「いいじゃない」とは言えなかったので、ただ黙って見ていた。ネックレスは結局、真智が中学に入る前に貴金属の買い取りに出されて、真智の手には入らなかった。ネックレスのことなどどうでもよかったが、祖母はしばらく落ち込んでいたと思う。

ふと、胸元のイボに視線がいった。

「まだ痛い？」

真智はそっと紫茶のイボの上に指を当ててみる。表面はザラザラしていて楕円で、根元は少しグラグラしている。

「もう大丈夫だよ、痛くない」

気持ちよさそうに祖母は湯船に寄りかかり、天井を見つめている。湯気が天井まで昇って集まって、水滴になって今に

も落ちてきそうだ。

「これなあに？ 病氣？」

「これはイボ。病氣じゃないよ」

コリコリと触る祖母の指は、長めの爪が生えていて美しく指を揃えていた。なんだか目立つ節まで美しく見えた。

「なんでできたの？」

真っ白い肌は柔らかく、やはり美しいと真智は思っていた。だからこそ、そこに一点乗ったイボが汚らしく、恐ろしく思えた。もしかしたら自分の肌にも生えてくるのではないかと、どこかで思っていたりもする。

「いつだったかな。気づいたらできてたね。年だからしょうがないよ」

どこかさみしく、揺れる水面のように祖母は笑った。白い湯気とその笑顔を隠していく。

ぽちゃん。天井から水滴が一滴落ちて、水面に大きな波紋を作った。温かい湯の中にと、だんだん頭が心地よくぼ

うつとしてくる。

「せつないねえ」

祖母の小さな声が反響して聞こえた気がした。当時の真智には「せつない」という言葉の意味がわからなかった。真智が不思議そうな顔をして見つめているのに気づいたのだろう。

「昔はよかったなって、ね」

祖母は恥ずかしそうに、どこか遠くを見ているように答えた。なおも不思議そうな顔をしている真智の頭を撫でた。

「今日はお風呂入るのやめようかね」

それは認知症の始まりだったのかもしれない。真智が高校の頃から、綺麗好きだった祖母が面倒くさがって風呂に入らなくなっていた。はじめは一日おき、二日に一回、三日入らなかったときは、さすがに臭いに耐えかねて家族みんなで風呂に入るように強く言った。

渋々という様子で、のそのそとタオルを持って風呂場へ向

かう姿は、記憶の中の祖母とは懸け離れていて、他人のように感じてしまう。

着替えは用意しておかない。拭き残した水滴を背中や脚に付けたままタンスを開けて着替えを漁る。せつかく畳んで入れた肌着はぐちやぐちやになって引き出しに収まらなくなつた。

真智が大学二年の春、祖母は庭先で転んで脚を折った。温かい春雨が柔らかい草木の芽を濡らす季節だった。すでに足腰が弱っていたのかもしれない。踏み石が雨に濡れており、滑ったのだ。八十歳になってからも、やや認知症は入っているが、健康のためと歩いていた祖母は、この日も一人で散歩がてら買い物に行こうとしていた。

しばらく唸りながら自力で立ち上がろうとしたが無理だったらしく、大声で台所にいる真智の母を呼んだ。静かに降る雨の中、祖母の声を聞き、駆けつけたとき、祖母は泥と草の汁で手のひらを汚しながら、まだ自力で立とうとしていたら

しい。

たまたま休みだった父が車で近くの病院に連れて行つた。診察では捻挫と言われた。本人もかなり痛がるので、しばらく安静ということで二、三日自宅のベッドで過ごすことになった。

湿布を貼って様子を見ていたが、なかなか良くならない。

それどころかなり痛がるので、隣町の大きな総合病院に連れて行き、診てもらったところ、骨折との診断が下つたのだ。

年をとってからの怪我は治りが悪いとはよく言つたもので、また脚から衰えていくのも本当だったようだ。歩けなくなつてから祖母の手脚は痩せ細っていった。痩せ細る手脚に比べて、なぜか腹だけは不自然に出てきた。元々下半身の肉付きがいい方だったが、不健康にぽっこりと下腹が出ているのだ。動けなくなつたため、便通も鈍くなり、腸が詰まっているのも原因の一つと考えられた。

脚を怪我して寝たきりになってからは、お風呂はヘルパーさんが来てくれる日以外は、ウェットタオルで身体を拭いてやる。父と母と真智が交代でやることになった。祖母は大人しくされるままに拭かれる。父は「痛くないか？ 気持ち悪いところはないか？」と声をかけながら拭くが、力が強いためか、祖母は「大丈夫」と言いながら少し顔をしかめているように見えた。

母が拭くときは、祖母が一番大人しい。息子の妻は他人という心情なのか、恥ずかしいのだろう。ただ黙って部屋の何もない空間を見ている。そして終わったら「ありがとう」と静かに言うのだ。

真智が拭く日はよく喋ると思う。背中が痒いだとか、オムツが気持ち悪いだとか言ってくる。ベッドから出られないのはかわいそうだし、昔は身体を洗ってもらったなと思いがら、背中を念入りに拭いてやったり、濡れてもいない替えたばかりのオムツを替えてやったりする。

大判の介護用ボディタオルは安くはない。正確に言えば安いものもあるが、安いものはすぐ破れたり、乾燥してしまったりと、それなりの理由がある。真智の家では、拭きやすい大判を選んでいる。時々はお湯で濡らしたタオルで拭いたりもするが、ボディタオルの方が使った後はすぐ捨てられることを考えると、ウェットシートタイプのボディタオルの使用が多くなる。

真智は一生懸命祖母の身体を拭く。ぽっこりと膨らんだ腹は、真っ白いままだったが、臍の中には、臍ゴマがガチガチに固まったものが、小石のように入っていた。真智には、白く粉をふいているそれを取り出す勇氣はなかった。

両乳房は幼いとき見たそれより、しぼんだ果実のようにぶら下がっていた。乳房の下も拭き、谷間を拭いて上に上がると、見慣れた黒い点と出会う。イボは昔からの大きさと色のままで、同じ場所にあった。他の場所はしおれているのに、イボには張りがあった。まるでこのイボが祖母の生命力を吸

い上げているかのようにだった。

ボディタオルが引つかからないように、イボの周りも丁寧に拭く。

「痛くない？」

皮膚に変色した、隆起した部分があるのだ。触れるとき、心配になって聞いてしまう。

「大丈夫だよ、気持ちいいよ」

祖母は目を閉じたまま答える。

首の皮は弛み、重力に逆らえず垂れ下がっている。前は肉付きがよかったせいかな、年の割に張りのある肌だったが、今は弛んで皺が増えた。

脇、腕と拭いていく。こちらも首と同じで皺だらけだ。気がつかなかったがシミも多い。何より記憶の中では真っ白だった手脚や首は、血行が悪いのか、内臓のどこが悪いのか茶色がかっている。まるで枯れ木だった。

手の先に生えている爪も茶色く、縦筋が入って伸び放題だ

った。人さし指の爪にご飯粒が挟まっていた。それも綺麗にしてやった。

昔は洗ってもらった側だった真智が、今度は祖母を綺麗にしている。懐かしさと悲しさが仲違いしている。なんともいえない気持ちだ。

三日に一回しか風呂に入っていなかったときよりは臭わなかったが、やはりヘルパーさんが来る入浴前は、すえた臭いが鼻腔をつく。この臭いは祖母の部屋を離れた後もしばらく付き纏うように鼻腔の中を漂う。リビングでごはんを食べていても、自分の部屋で本を読んでいても、ふと気づいたときにその臭いがする瞬間がある。まるで祖母がすぐそばにいるような気になった。

一年程前、祖母が庭先で転んだ頃だろうか。

真智の胸、乳房の間の上あたりに小さなニキビが一粒できた。先端が赤みを帯びて、わずかに隆起していたが、普通の

ニキビとは違い、膿が出たりしなかったが、なかなか治らなかった。それどころかだんだん硬くなっていき、気づいた頃には平たい小豆くらいのイボとなっていた。

祖母と同じ場所に同じくらいの大きさのイボができるなんて、一瞬は遺伝子の神秘に感心したが、いままで何もなかった白い肌に現れた異物にショックを受けた。ホクロなどは真智にもあったが、それとイボとは話がちがう。腰や笑窪ら辺にある小さなホクロは美しいとか可愛いとか感じるが、表面がザラザラした紫がかった茶色の、少し盛り上がったイボは到底美しいとは思えなかった。

皮膚科に行けば、レーザーやドライアイスなどで取ってもらえるとネットで調べたらわかったが、大学をはじめとした日常の用事の間に通院するのは面倒にも思えた。また、治療にかかる金額は、大学生の真智には痛かった。両親に相談して出してもらうという手もあったが、自分でなんとかしろと断られると勝手に諦めている節が真智にはあった。

なるべく気にしないように、そのうち病院で取ってもらおうと、着替えや風呂のとき以外はほぼ忘れて生活していた。

だが、部屋着で着ている襟首の広がったTシャツを着替えるとき、そのイボに引っかかってしまったことがあった。じわりとイボの周りに血が滲んだ。どこか切れたらしかった。しばらくティッシュで押さえていると、血は止まった。ティッシュの下には何事もなかったように紫がかった茶色のイボがそこにあった。

また、風呂で身体を洗っているとき、あかすりタオルが引っかかったこともあった。風呂から出てティッシュで押さえると、わずかに血がついたがすぐ止まった。

また何かの拍子に爪を引っかけたり、衣服を引っかけたりしているうちに、イボの根元は不安定にグラグラとしだした。そしてある夜、ふと、祖母が風呂場でネックレスを胸のイボに引っかけたことを思い出した。そしてどこかで、イボの根元を糸できつく縛ることで取ることができるという記事を

見たのを思い出した。

好奇心もあった。本当に取れるのかという好奇心、取れたイボの断面はどんなのだろう、そして、取るときに痛みは生じるのか、自分は痛みに耐えられるのかという好奇心。無自覚な好奇心が沸々と真智の中で湧き上がった。

深夜〇時、母親の裁縫箱からそつと糸を拝借した。細くて強い方がいいだろうと、白いミシン糸を一メートルほど切つて持ち出した。小さなイボを括るだけだが、何周するかわからないし、失敗したときのため、余裕をもった分量にした。イボを強く縛ることで壊死させるということだったので、血はそんなに出不いだろうと思い、念のための絆創膏と消毒液を用意した。

何回か引つけてグラグラとなった根元を見ると、皮膚に繋がっている部分は数ミリしかないようだった。そつと糸を一周巻き付けた。ゆっくり引き締めていく。いつ痛みが襲うかドキドキしたが、ぐつと締めたが思ったような痛みはなか

った。ただ糸で縛られているという感覚しかなかった。もつと力のかぎり締めることもできたが、糸が肉片を切断するイメージが脳をよぎり、恐くなったのでやめた。同じくらいの強さでもう二、三周巻き付けた。何かあるといけないので、すぐほどけるように蝶結びをした。

そのまま十分ほど置いた。見た目は何も変わっていない。触っても何も変わっていない。蝶結びを解いて、もう少し強く締めて結び直した。

そのまま十分くらい置き、様子を見て、また強く縛り直すのを繰り返した。そのまま置いておいてもいいものを、暇つぶしに読んでいた本の内容も入ってこず、十分くらいで様子をみてしまうのだ。三十分くらいすると、ややイボは紫みを増した気もしたが触った感覚的には何も変わっていないようだった。

そこで、この糸はどのくらいの時間巻き付けておかなければいけないのかという疑問に思い至った。細い糸とはいえ、

そんな長い間巻き付けてはおけない。何も考えずに実行した自分の浅はかさに呆れた。

短い間考えた結果、真智は自分の机からカッターナイフを取り出した。普段、紙などを切るのに使っているカッターだ。

糸を巻き付けたとき、痛みがなかったため、皮膚に繋がっているわずかな芯さえ切ってしまうばなんとかなると思ったのだ。皮膚についているのは数ミリ。切ったとして、転んだときの擦り傷や、包丁で指先を切ったときの切り傷と同じくらい、なんならそれより小さい傷かもしれない。だとすれば用意した絆創膏で十分保護できるだろう。

なるべく血を止めておいた方がいいだろうと、もう少し糸を締めたままおいておくことにした。

午前一時十五分、作戦を執行する。イボの表面は少し硬くなったように感じる。またグラグラとより不安定になっている気もする。

カッターの刃先を除菌シートで拭く。さすがにバイ菌が傷

に入るのは恐ろしい。そんなに使っていないカッターナイフは鈍く銀色に光っている。

「自傷行為」。そんな言葉が頭をよぎる。だが、すぐに頭を振る。これはイボを取るため。決していたずらに自分を傷つけるためではない。邪魔なイボを取り去るための行為なのだ。多少傷跡は残るかもしれないが、よく見なければわからない程度だろう。二十代の治癒能力を信じている。

カッターを使う前に糸を解いておく。グラグラの根元に消毒液をかけ、カッターの刃を根元に当てる。血が止まっているであろう間に切ってしまうなければ。机の上に乗せた小さな卓上鏡を、身を乗り出して覗く。さすがに刃物を自分の肌の一部に当てると緊張する。素早く切れば痛くないだろうか。躊躇しているとき、ふと歯を食いしばっている自分がいた。一度、カッターを置いて、ふうっと息を吐く。

思い出したように、タンスの引き出しを開けてピンクのタオルハンカチを取り出す。普段使い用の肌触りのいい清潔な

ハンカチを、真智は口にくわえた。テレビドラマや映画で、痛みを我慢するとき、舌を噛まないように布を噛んでいるのを観たことがある。初めてだが、それを見様見真似でしてみた。上下の歯の間に柔らかいハンカチが入るだけで、だいぶ顎の負担が減り、自然に力が抜ける気がした。

鼻から再び息を吐き、今度はカッターの刃をぐつと動かした。

思ったより痛くない！　だが、思ったより切れない！

ティッシュで剥がれかけのイボを摘みつつ、剥ぎ取るようにカッターを動かしていく。ぐつぐつと三回くらいに分けて切った。呼吸を忘れないように、意識して息を吐いて吸った。

最後は一気に奥に刃を押し出すと、イボはぷつりと取れた。血は思ったより出なかった。糸で縛っていたのが効いたのか。かさぶたを無理に剥がしたときのように、じんわりと丸く血が出てきて、赤くぷつくりと盛り上がった。新しいティッシュでちよんちよんと血を拭い、絆創膏を二枚、十字に重ねて

貼った。ガーゼ部分に赤黒い丸が透けて見えるが、染みてはこない。痛みもない。

摘んでいたティッシュをそつと広げると、平たい三、四ミリの茶色の物体があった。じつと観察すると、自分の目が顕微鏡になったように、だんだん表面が近く見えてくる。ぶつぶつとした塊。肌の何が集まってできているのか。長く見ているとなんだか気持ち悪くなってくる。だが反対に自分の肌から切り離されたこれは、どんな感触なのか。また好奇心が湧いてきた。

指でつついてみる。ティッシュの上に乗っているからか、肌についていたときよりフニャフニャと頼りない。裏返してみると、同じ色だが表よりぶつぶつは少ない。イボの部分だけが綺麗に取れたようだ。顔を近づけてしばらく眺めていたが、茶色いぶつぶつが指先から全身を埋め尽くすような、ゾワゾワした感覚が一瞬駆け抜けた気がした。気持ち悪くなったので、ティッシュで丸めてゴミ箱に捨てた。変な汁などが

ついていたら困るので、手もよく洗った。

片付け終わると爽やかな気分になった。夜中二時近いというのに、目が冴えている。興奮しているのだろうか。寝る前に再び卓上鏡を覗く。絆創膏の下に、あの邪魔なイボがないと思うと晴れ晴れしい気持ちになる。しばらくは絆創膏を貼っておかなければいけないが、元通りの白い肌に戻るのが楽しみだ。真智は爽やかな気持ちのまま布団に入った。

三日もすると、薄皮が張り、絆創膏も取れた。そして気づかぬうちに元の白い滑らかな肌になった。そして真智は自分にイボがあつたことなど忘れていったのだ。

天気の良い冬の午後、祖母はぼんやりテレビを観ていた。いや、テレビから垂れ流されるバラエティ番組の再放送は誰も観ていなかったのかもしれない。昼食のおにぎりを食べ終わった頃かと、真智は祖母の部屋を訪れた。割れないプラスチック皿は空になっており、二個出したおにぎりは食べ終わ

っていた。

「ちゃんと食べられたね」

皿を回収してきつくと立ち去ろうとした。

「オムツは大丈夫そう？」

ここで大丈夫と言ってくれば、早々に戻るなと心のどこかで考えながら、祖母の顔を覗く。

相変わらずぼうっと一点を見つめていたようだったが、問いかけにはっとしたのか真智と目を合わせる。

「あ、ああ。大丈夫だよ」

今日はなんだか調子が良さそうだ。そんなとき、ホッとするのも真智の本心だった。

「真智ちゃん、棚からブラシとって」

棚には祖母のヘアブラシの他にも、痒み止めや昔使っていた椿油などが置いてある。窓から差し込む西日に当たって、椿油の瓶は暖色に輝いているように見えた。中身はほとんど揮発してしまい、酸化した油の臭いがした。

ずっと枕に押し付けられているせいで祖母の柔らかい髪は潰れて薄くなっていた。昔は定期的にかけていたパーマも伸びっぱなしになっていた。白髪染めも無論しなくなったので、ペタンコになった白髪から透けて頭皮が見えてしまっている。本人は気にしているのかしていないのか、最近は髪も梳かさず、たまにポリポリと頭を掻いているだけだった。

痒いのかとドライシャンプーをしようとしたが、面倒くさいと、本人が言うので家族の負担をわざわざ増やさなくてもよいかと、ヘルパーさんが来るまで頭髮については放置していた。

真智も、枯れ木についた枯れ葉のように、触れれば落ちていく抜け毛をわざわざ増やしたくはなかった。

ヘアブラシを取ってやると祖母は髪を梳かそうとした。

「ちよっと待って、身体起こしてあげる」

背中枕を挟んでやる。少なくなった髪を祖母は丁寧に梳かす。まるで昔の祖母のように。

「椿油なかったっけ？」

「もう少ししかないと思う」

本人が満足すればと、棚から椿油の瓶も取って渡す。椿油は家族の誰も使っていないので、瓶にあるだけしかない。

祖母は、瓶を何度も振って残った少ない油を手のひらに出そうとしている。貴重な数滴は皺だらけの手のひらで吸収されてしまうのではないかと思うほどわずかだったが、それを大切に祖母は髪につけた。白髪とまだ色のついた赤茶の髪が西日に輝いた。酸化した油の臭いとすえた老人の臭い、埃の臭いが混じって不思議な気持ちになる。懐かしいような、嫌なような、大切なようなものが混在する空間においだった。パーマの伸びた髪は祖母はなんだかしっくりこない。梳かして整えた髪型も自分の祖母ではないように思えた。

「真智ちゃん、その引き出しからアルバム取ってちょうだい。青い表紙の」

指さされた戸棚の引き出しを開けると、古めかしい陶器の

ブローチやイヤリング、真智が小さい時にあげたビーズで作ったブレスレットや折り紙の花などと一緒に青い表紙のアルバムが一冊入っていた。青い表紙と言っても、古いものらしく茶色がかっている。台紙もやはり茶色くなっている。

祖母に渡すと懐かしそうにページを開いた。

「おばあちゃんの子供の頃は写真なんてなかったからね、それに戦争もあって大変だったから、このアルバムにあるのは、お父さんが産まれてからの写真」

そう言つて真智に、はじめの写真から一枚ずつ解説を始める。

しまったと思った。これは思ったより長引きそうになってしまった。部屋を出るタイミングを逃してしまった。だが、久しぶりに楽しそうに話す祖母の姿を見ると、話を遮って途中で部屋を出ていく気にもならなかった。

「これはお父さんが小学校に入ったとき、写真って言ったら緊張した顔になって。こっちは真智の叔母ちゃんだね。産ま

れて一週間とかそこらの。こんなに昔は小さくて」

しばらく祖母が母親だったときの話が続いた。写真を見つづ祖母の話を聞き、また意識の半分は始まったばかりのやり再放送の刑事ドラマへと向いていた。祖母にバレないように時々相槌を打つのは忘れない。

「これはみんな海に行つたときのだ」

祖母が指さした写真は褪色してセピア色になっていた。祖母と海水パンツ姿の八歳くらいの父、ボーダー模様の帽子とお揃いの水着を着た三歳くらいの叔母が映っていた。波打ち際で、母親である祖母の足元にお尻をぺたんとつけて座っている叔母は、陽射しが眩しいのか眉間に皺を寄せた表情で写っている。反対に父は右腕を頭の上で曲げ、左腕を腹の辺りに持ってきている、いわゆる「シェーポーズ」をしていた。いかにも元気いっぱいな、いたずら盛りという印象を受ける少年だ。

そしてその写真の中央には、若かりし頃の祖母が二人の子

供を優しい目で見つめている。娘と同じボーダー模様のワンピース水着からは、スラリとした白い脚が伸びていた。セピア色の写真からは水着などの色はわからないが、祖母の肌が白いのはわかった。日に焼けた少年の父が横にいたので一層その白さが際立った。

祖母の髪はふわふわの巻き毛が肩まであり、昔の外国の映画の女優のようだった。

「おばあちゃんの髪、映画の女優さんみたいで素敵ね」

真智は思った感想を素直に伝えた。祖母は嬉しそうに弾んだ声で、写真の自分の髪を指しながら応えた。

「でしょう。おばあちゃんは流行の最先端だったから、パーマもこの辺だと一番最初にあてたんだよ。それに髪も茶色に染めてたんだ」

言われてよく見れば、セピア色でわからなかったが、少年の父の海水パンツが黒だとすると祖母の髪はそれよりもやや薄い色に見えた。

「スタイルもいいでしょ？」

また得意そうに祖母は言った。

水着の胸元は曲線を描いていて、胸の谷間が少しのぞいていた。そこには見慣れたイボは映っていなかった。そのことには触れず、写真に目を落としたまま真智は答える。

「うん、とっても綺麗」

素直な感想を伝えると、祖母もまた嬉しそうに微笑んでくれると思った。だが、ちがった。

弾んだ声が返ってくるかと思ったが、長い沈黙が続いた。どうしたのかと祖母の顔をちらっと見ると、眉間に皺を寄せ、険しい顔をしていた。どこか痛いのだろうか。

「あ、こっちはお父さんとお母さんの結婚式の？」

止まったような空気に耐えられず、真智の方から次の写真を指さす。こちらは、カラー写真だ。袖の膨らんだウェディングドレスを着た母と、タキシード姿の父、そして黒留袖の祖母が写っていた。海の写真ではふんわりとした髪を下ろし

ていたが、こちらでは後ろでまとめられている。五十代のはずだが、着物から伸びる首、ふつくらとした赤い唇は艶っぽかった。

「うん、うん。真智ちゃんのお母さん、綺麗だね」

「おばあちゃんも綺麗だよ」

褒めたつもりだったのに、祖母はまた沈んだ表情になった。震える手で祖母はページをめくった。次のページからは、赤ちゃんや幼稚園のときの真智も写っていた。

急に恥ずかしくなって、さりげなく祖母の手を掻い潜り、次のページをめくろうとした。

「ほら、真智ちゃん、かわいい！」

一際元気になって、祖母が一枚の写真を指さす。真智の小学校の入学式だった。校門の前の「入学式」と書かれた立て看板の前で、祖母と二人で撮ったものだ。父と母も一緒にいたのだが、一番真智の面倒を見てくれる祖母と二人で、最初一枚は撮ろうということになったのだ。祖母は白黒の

千鳥格子のツーピース、真智はピンクのワンピースにセットジャケットを着ている。胸に「入学おめでとう」と書かれた札のついた可愛い花のコサージュを付けてもらったのを覚えている。

「かわいかったなあ」

一人の世界に入ったように、祖母は背を曲げて写真を覗き込んでいる。

「おばあちゃん？」

再び沈黙した祖母が心配になり声をかける。祖母はしばらく黙っていたが、絞り出すような声で言った。

「せつないねえ」

また「せつない」だった。急な感情の変化に真智は少し恐くなった。

「せつないねえ。昔はこんなに綺麗だったのにねえ」

祖母は皺だらけの茶色い枯れ木のような両腕を見つめながら「せつないねえ」を繰り返している。俯いた頭のつむじは

毛が寝て、地肌がよく見えた。ずっと見てきたふわふわの巻き毛はもうない。

「せつないよお」

しまいに祖母は布団に顔を伏せ、泣き声のような声をあげた。真智はどうしていいかわからず、そっと祖母の背中に手を当てる。寝汗なのかしつとりとパジャマは湿っていた。鼻腔をあの臭いがついた。

「大丈夫？」

真智の問いかけには答えず、「せつない」「昔はよかった」を繰り返して泣いているようになっていく。まるで劇のようになり、祖母を、だんだん冷ややかな目で見ていく。真智がいた。真智もそんな自分に気づいた。

「またあとで来るね」

真智は聞いているのかわからない祖母の耳元で伝えると、空の皿を持って台所に降りた。

祖母の部屋のテレビはつけたままにしておいた。落ち着い

た祖母がさみしくないように、またわざとらしい泣き声を消してくれるように。

ドラマの再放送も終わり、夕方のニュースが始まる時間だった。

日々が過ぎるにつれ、大人しく無気力になっていった祖母だが、元気な日は、と言っても身体は動かないのだが、気持ちを追いついていないのか、混乱しているのか、ひどくわがままを言った。

ごはんが箸でうまく食べられない。スプーンもうまく持てない。食べさせてくれないなら食べられない。などと喚き散らした。普段の祖母では考えられない言動に、父も母も困ってしまった。

「母さん、みんなそんなに暇じゃないし、手は動かせるんだから自分で食べてよ」

優しく父が諭すが、不貞腐れたのか、祖母は箸もスプーン

も置いて、黙って窓の外を見ている。父と母は互いに顔を見合わせている。

このやり取りを部屋の外から見ている真智は、両親の横をすり抜け、祖母の食事の乗ったお盆を手にとった。

「ちよつと待つてて」

台所で真智は、お茶碗に入ったごはんをボールに移した。

今日の祖母の昼食は、鶏の照り焼きだった。六等分に切られた鶏肉を、食べやすいように一口大にキッチンバサミで切る。ボールのごはんに混ぜ込み、おにぎりにしていく。ラップを使おうとしたが、昔祖母が握ってくれたまん丸おにぎりを思い出しながら、手で握った。鶏の照り焼きの油が手についてぬるぬるして気持ち悪かった。おにぎりを皿に乗せ、石鹸で手を洗う。一回では油が取れず、二回洗った。

おにぎりに乗せたお盆を持って、祖母の部屋に戻ると、祖母はまだ外を黙って眺めていた。母はいなかったが、父は部屋にいてつけっぱなしのテレビを眺めていた。真智の持つて

きたおにぎりを見て、驚いた顔をしたが、感心した笑みをこぼした。

「おばあちゃん、おにぎりにしてきたよ」

「母さん、真智が握ってくれたよ。よかったね」

祖母はゆっくりお盆の上を見たが、またすぐ顔を背けてしまった。

「いらない」

「これなら手で食べられるよ。おかずも混ぜてあるから、これだけ食べればいいよ」

真智はおにぎりを一つ持って祖母に差し出した。

「いらないよ、こんなの。こんなにぐちゃぐちゃにしちゃつて、食べられないじゃない」

やっとこちらを向いた祖母は、低い声でぼそつと言った。

真智は返す言葉もなかった。喉の辺りまで熱い衝動がこみ上げてきたが、きつとそのまま口から出してしまえば、ひどい暴言になってしまうのはわかっていた。だからぐつと息を

止めるように肩に力を入れて、黙っていた。目に涙が溜まってきた。

「母さん！ 真智がせつかく作ってくれたのに」

父が祖母に強い口調で注意したが、祖母はまた窓の方を見ている。

涙が落ちる前に真智は部屋を飛び出した。おにぎりを触った手が油で気持ち悪かった。手を洗わなくてはいけない。

夕食前に、台所に入ったとき、ゴミ箱に鶏肉の混じったおにぎりが捨てられているのを見つけたが、真智はそのときには、他人事のように、結局食べなかったんだと思うだけだった。ゴミ箱に捨てられたそれは、汚いごみになってしまったのだ。

脚を折ってから一年半ほど、秋風が庭の木々の葉を吹き集める季節、祖母は亡くなった。

最期の方はまるつきり理屈のわからぬ幼子のように、愚図

って大声を出すことも多かった。真智も両親も、脚を怪我して動けない祖母に対する憐れみや、世話になった祖母に対する恩などよりも、ただ疲れた、という感情だけが大きくなっていった。祖母の葬式が終わった今は、悲しみよりも安堵という思いが先立った。

真智も出棺のとき、一度泣いただけで、祖母のいない日常へと戻っていった。

風呂場のすりガラス戸を開けると、脱衣場に湯気が流れ込んで洗面台の鏡が一気に曇った。真智は乾燥機でふわふわに仕上げたバスタオルを掴み、傍らの少女の身体を優しく包んだ。透けるような白い肌は、強く扱えばすぐ傷んでしまう桃の実のようだ。擦り過ぎればタオルの繊維でさえ、傷がつきそうにも思えた。だが、ちゃんと拭かなくては大事な娘が風邪をひいてしまう。

真智の一人娘である明莉^{あかり}は五歳になる。最近はなんでも一

人でやりたがるが、まだまだ危なっかしい場面の方が多い。

「あとは自分で拭く！」

こんな感じだ。背中拭いてやったので、手の届く範囲は拭けるだろうとタオルを渡す。一昨日は脚に水滴を付けたまま下着を履こうとしていたが、今日は忘れずに拭けた。そんな子供の成長の早さに感心しつつ、さびしさも感じてしまう。

全身を拭けたところで、手早くボディミルクを塗ってやる。ベタつくとも明莉は嫌がるが、乾燥肌のため保湿を怠るとすぐあかぎれのようにになってしまう。

肌着を着せ、パジャマを着せる。お気に入りのキラキラタ―が胸に描かれているピンクのパジャマは明莉のお気に入りだ。

嬉しそうにはにかむ口元から、白い小さな乳歯が見える。

少し前に上の前歯が一本抜けて隙間が空いている。その笑顔が愛おしい。真っ赤に上気した柔らかい頬を両手で包み込む。真智も明莉も同じ笑顔になる。

「あとは、パパにドライヤーしてもらっておいで」

明莉の髪は暖かいリビングで乾かす。ドライヤーをしている間の暇が待てない明莉を退屈させないため、テレビで好きなアニメを見せながら髪を乾かす。真剣に観ていて、じっと大人しくしているが、耳の周りの毛を乾かすとき、ドライヤーの音がうるさいと文句を言われる。と、夫がよく言っている。すぐ遊び出す明莉を、風邪を引かせないために湯上がりは流れ作業である。服を着せるまでは真智の仕事、髪を乾かすのは夫の仕事と、なんとなく決まっていた。

「真智はゆっくり保湿してて」

明莉を連れていきながら夫が小声で囁く。五年前に結婚した三つ年上の夫は、気が利くし、娘の面倒もちゃんと見てくれる。そういうところが好きで、結婚の決め手だった。

明莉の乾燥肌は真智ゆずりである。三十歳になってからは特に乾燥がひどい気がする。化粧水を全身に塗ってからボディミルクを塗るほどだ。明莉のボディミルクとは別のボディ

ミルクを棚から取り出し、丁寧に塗っていく。薔薇の甘い香りが脱衣所に広がった。

換気扇を回しているため、徐々に洗面台の鏡の曇りがとれていく。見慣れた顔と身体が映る。最近少し肉付きがなくなった輪郭は、風呂上がりは浮腫みがとれるのか、ややすっきりした印象になる。血管が透けて青く見えるほど白い肌は昔からの自慢だ。日焼け止めや保湿などのケアは欠かせない。

細い指先でマッサージをしながら保湿をしていく。指先の爪は綺麗に整えられツヤツヤとしたトップコートが塗られている。

セミロングの黒髪をまとめたうなじにも塗る。上気した肌は微かに薔薇色に染まっている。でも真智がもし画家だったら、自画像は細い線で描くだろう。陶器のように冷たい白色で肌を塗る。白い肌こそが美しい。

細い鎖骨に滑らかに指を滑らす。くるくると優しくマッサージしていく。左から右へと指を滑らせたとき。

「あら、何かしら」

胸の鎖骨と鎖骨の間、何か違和感があった。滑らかな肌の上に一点小さな隆起があった。少し赤みもある。

「ニキビ？ 毛穴詰まりかしら？」

軽く指でなぞりながらなんだか嫌な予感する。湯気はとつくに消え、鏡には冷えた真っ白な身体が妙にはっきりとした輪郭で映っていた。

今回ご応募いただきました多くの作品の中で、惜しくも最終審査において入賞を逸した作品名を紹介し、今後の執筆に期待いたします。

青年文学賞

清潔な愛

付着

光をうむ手

ドクダミの花

三十分の眠り

聖なる君は人の子

松茸とグスコブドリ

足搔いて、愛

不在着信

赤庭 コガネ

檜原 雅之

風待 葵

天野 周

長船 悟

谷 紀之

管 和輝

畔上 朋丈

後藤 怜

第十九回 「舟橋聖一文学賞」について

趣 旨

彦根市民が豊かな心を育み、彦根市に香り高い文化を築くため、舟橋聖一文学賞を制定し、彦根市名誉市民である舟橋聖一文学の世界に通ずる優れた文芸作品に対し、賞を授与するものです。

四 賞

正賞 賞状および額入り舟橋聖一胸像
副賞 金 二十五万円

一 設置者

彦 根 市

五 発表期日

令和七年十一月～十二月（報道関係に発表する。）

二 選考委員

佐藤 洋二郎（作家）
藤 沢 周（作家）
増田 みず子（作家）
富岡 幸一郎（文芸評論家）

六 授賞式

令和七年十二月（予定）

三 授賞対象作品

作品の種別は小説で、六月一日を基準日とし、おおむね同日前一年間に刊行された単行本であること。

第三十七回「舟橋聖一顕彰青年文学賞」作品募集要綱

趣 旨

作家・故舟橋聖一氏は、井伊直弼公を題材にした小説『花の生涯』を執筆し、それが後に映画や演劇となり、また第一回のNHK大河ドラマとして放映されたことで、直弼公と彦根市の名が全国に知られるようになりました。そのため、本市では、このような多大なる功績をたたえ、同氏を彦根市名誉市民第一号にするとともに、広く青少年の文学奨励をはじめ、教育・文学の振興を図るため、同氏を顕彰する文学賞として、平成元年度から文学の登竜門となる「青年文学賞」を設けました。

今年度も下記のとおり全国の青年各位から優れた作品を公募します。

一 設置者

彦根市

二 選考委員

佐藤 洋二郎 (作家)

藤沢 周 (作家)

増田 みず子 (作家)

富岡 幸一郎 (文芸評論家)

三 応募要領

(1) 応募作品

小説・随筆・戯曲・評論

※同一作品部門の応募は、一人一編に限る。

(2) 応募規定

四〇〇字詰め原稿用紙五〇枚以内(随筆については、一〇枚以内でも可)で縦書きとする。

(ワープロ原稿の場合は、A4サイズ横・一行四〇字×二五行で縦に印字し、四〇〇字詰め換算枚数を明記する。)自作未発表のものに限る。生成AIの使用は不可とする。

※郵送または持参による提出の場合、応募作品には、指定の応募票を記入および添付すること。

(3) 応募資格

令和七年九月一日現在、満十三歳以上満三十歳以下(平成六年九月二日から平成二四年九月一日までに生まれた人)

ただし、今まで入賞した作品部門での応募はできない(佳作を除く)。

(4) 応募期間

令和七年六月一日(日)～九月一日(月)

(郵送の場合は、当日消印有効)

(5) 提出先

〒五二二―〇〇〇一

滋賀県彦根市尾末町八番一号

彦根市立図書館内「舟橋聖一記念文庫」事務局

(TEL) 〇七四九―二二―〇六四九

(6) 提出方法

以下の①～③のいずれかの方法による提出とする。

① インターネット（彦根市電子申請サービス）

② 郵送（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）

③ 持参（封筒の表には「青年文学賞応募作品在中」と朱書すること。）

(7) その他

※応募作品は、一切返却しない。

※入賞作品の著作権は、彦根市に帰属する。

※最終選考に残った作品は、受賞録に作品名、氏名等を記載することがある。

※入賞作品を収録した受賞録は、彦根市ホームページ上で公開する。

四 賞

優秀作品には、「舟橋聖一顕彰青年文学賞」を授与する。

正 賞 賞状および舟橋聖一色紙

副 賞 金 十五万円

※なお、佳作はなしとする。

五 発表期日

令和七年十一月～十二月（報道関係に発表する。）

六 授賞式

令和七年十二月（予定）

あと書き

第十九回舟橋聖一文学賞

第三十七回舟橋聖一顕彰青年文学賞

本作品集は、受賞作品ならびに作品の講評
などをまとめたものです。

受賞者への感謝とお祝いを申し上げます。
おめでとうございます。

令和 7 年 1 2 月

編集・発行 彦 根 市
事務局 滋賀県彦根市尾末町 8 番 1 号
彦根市立図書館内
「舟橋聖一記念文庫」事務局
TEL 0 7 4 9 (2 2) 0 6 4 9